

THE FINEST
VOYAGE
TOGETHER

ASUKA

CLUB MAGAZINE

ASUKA
CLUB
MAGAZINE

NO. 105

Autumn 2022



秋たつや、誘われて旅。

Special
日本工芸会
×
飛鳥クルーズ
コラボレーション

Special
秋の
西国漫遊クルーズ

Essay
角田光代

Interview
押尾コータロー

Introduce
飛鳥II物語

Collection
寄港地プレート

Foodie
前菜

ASUKA CLUB

2022年8月17日発行

発行/郵船クルーズ株式会社 ASUKA CLUB 事務局
〒220-8147 横浜市中区みなとみらい2-2-1 横浜フロンティアタワー4F 階 TEL. 045(6)005302
発行人/尾藤弘之
ホームページ <https://www.asukacrui.se.co.jp>



予告

アスカクラブ
会員サイト
「My ASUKA CLUB」が
スタートします。

多くの会員様からいただいていた
優待券のデジタル化のご要望や、
環境負荷の軽減を考慮し、スマートフォン、PC、
タブレット等でご利用いただける
アスカクラブ会員サイト
「My ASUKA CLUB」をスタート
させていただき運びとなりました。
これまで以上に、アスカクラブ会員の皆様へ
よりパーソナルなサービスが実現します。
ご期待ください。

詳しい登録案内は後日お届けします。

PCサイトイメージ

スマートフォンイメージ

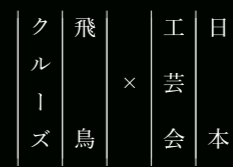
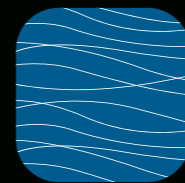


掲載しております表示イメージは、変更となることがございます。

特集1

Special Feature 1 asuka collection

日本の至美と、感動をつなぐ。
日本工芸会と飛鳥クルーズの
コラボレーションが
はじまりました。



Japan Kōgei Association × ASUKA CRUISE

洋上の工芸コレクション

コラボレーションへの期待

日本工芸会 理事長

林田英樹



このたび日本が世界に誇る工芸作品を、飛鳥IIの船内のさまざまな場所でご覧いただけることになり本当にありがたく思っております。これらの作品は、国が「日本の重要な文化として保存すべきもの」と定めた技を、長い鍛錬のもとに身に付けた工芸作家たちが一点一点精魂込めてつくったもの。現代の伝統工芸の作品がこれだけ一堂に会することはまれで、大変貴重な機会といえます。乗船中のお好きな時間に何度でもご覧いただき、実物の素晴らしさ、魅力というものをお楽しみいただければ幸いです。



吉田美統「釉裏金彩牡丹唐草瑞鳥文 飾皿」



桂 盛仁「道導べ(ハンミョウ)香盒」

人間国宝の
作品をはじめ
伝統工芸の
逸品の数々が
船内に

未来に受け継がれるべき日本の伝統文化。その伝統工芸において重要無形文化財保持者（人間国宝）を中心に、伝統工芸作家や技術者等で組織されている「公益社団法人 日本工芸会」と飛鳥クルーズのコラボレーションが実現しました。飛鳥IIの船内各所には、人間国宝をはじめとする作家の作品を展示。作品の中には飛鳥IIでの展示をイメージして選ばれたものも多く、他では出会えない特別な洋上のコレクションと言えます。

お客様と至美との出会いの場が生まれることで、全国津々浦々に息づく伝統工芸とつながっていく。それが日本の伝統文化の継承と発展。さらに寄港地やその地域への応援と地方創生につながっていく。飛鳥IIのクルーズでしかできない体験、その新たな感動をお客様にご提供するためのコラボレーションです。



日本工芸会について

公益社団法人 日本工芸会は、重要無形文化財保持者（人間国宝）を中心に伝統工芸作家、技術者等で組織され、先人から受け継いだ世界に卓越する優れた伝統工芸の技術を一層練磨するとともに、今日の生活に即した創造性、芸術性に優れた作品を生み出しています。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の分野があり、正会員約2000名が全国各地で活動しています。

deck 11 イー・スクエア



deck 5 アスカプラザ



deck 6 右舷後方通路



deck 6 前方エレベーターホール



deck 11 ザ・ベール



deck 6 スモークラウンジ



deck 5 レセプション



deck 11 和室・游仙



deck 11 リドガーデン



まるで船内全体が
美術館のよう。
知的好奇心が、
満たされています。

作品の
鑑賞と
ご購入も

飛鳥クルーズのひとときに、新たな
楽しみが加わりました。船内、アスカ
プラザやレセプション、イー・スクエア、和
室・游仙、リドガーデンなど、各所で人
間国宝をはじめとする作品をご覧い
ただけます。日本工芸会所属の伝統
工芸作家の作品で、船内はあたかも美
術館になったかのよう。皆様の知的好
奇心を満たす、またとない機会となる
ことでしょうか。
ご購入も本船にて承ります。オンラ
インショップでの販売も行っておりま
すので、ぜひご覧ください。

特集1 / 日本工芸会 × 飛鳥クルーズ

Photographs by Yosuke Owashi, Taishi Sakamoto

Special Feature 1 asuka collection

船内展示作家名
(敬称略・分野五十音順)

- 陶芸
- 伊勢崎淳★
- 伊藤赤水★
- 伊藤栄傑
- 井上萬二★
- 十四代今泉今右衛門★
- 鯉江廣
- 小山耕一
- 佐伯守美
- 十五代酒井田柿右衛門
- 庄村久喜
- 新庄貞嗣
- 神農巖
- 鈴木徹
- 中田一於
- 中村清吾
- 福島善三★
- 星野友幸
- 保立剛
- 前田昭博★
- 前田正博
- 望月集
- 吉田美統★
- 染織
- 土屋順紀★
- 村上良子★
- 漆芸
- 鶴岡敏伸
- 奥井美奈
- 奥窪聖美
- 北岡道代
- 小森邦衛★
- 田口義明
- 増村紀一郎★
- 松崎森平
- 松本達弥
- 三好かがり
- 室瀬和美★
- 戴内江美
- 山岸一男★
- 木工
- 奥村公規
- 押山元子

- 桂盛仁★
- 北村眞一
- 鈴木盛久
- 玉川達士
- 萩野紀子
- 般若泰樹
- 般若保
- 木竹工
- 五十嵐誠
- 勝城蒼鳳★
- 川北浩彦
- 川北良造★
- 村山明★
- 諸工芸
- 栗根仁志
- 池田貴普
- 江里朋子
- 氣賀澤雅人
- 渡邊明

★重要無形文化財保持者
(人間国宝)
※展示されている作家および作品は変更となる場合がございます。

詳しくは
飛鳥クルーズ
ホームページを
ご覧ください。



十四代

Inaizumi Inaemon XIV

工房を訪ねて

今泉今右衛門

世界的にも有名な焼き物の町、佐賀県・有田。
この地で十四代に亘って名跡を継ぐ
今泉今右衛門氏の工房を訪ね、
お話を聞きました。

400年以上続く

鍋島藩の 御用赤絵師

「まずは『今泉今右衛門』という
名跡について教えてください。」

江戸時代の有田には、一般的に流通する焼き物とは別に、鍋島藩のお殿様が幕府へ献上する「色鍋島」を作る藩窯がありました。それは精巧な技術のもとに品格を求めて作ったと言われていいます。当時は、焼き物の表面のガラス質の上に文様を描く「上絵付」と、その本体の染付までの「生地づくり」は分業。上絵付の仕事を今右衛門家は江戸時代、初代から九代まで、藩の御用赤絵師として仕事をしていました。明治以降は、藩の保護がなくなり、生地から上絵付までの一貫した仕事にのり出しました。

墨はじき という品格

「創作には品格を大切にしていると
お聞きしました。」



はい、それは代々伝わる「墨はじき」の技法にも通じることなのです。墨はじきというのは、書道に使う墨で文様を描いて、その上に絵具を載せる。墨に入っているニカワが絵の具をはじき、それを素焼の窯で焼くと墨が焼き飛び白抜き線が浮き出てくるという技法です（作品を指差しながら）。この墨はじきが使われた青海波の文様を最初に見た時には「どうして背景の波文様に手間暇をかけるのか？」と思いましたが、よくよく見てみると、確かにこの波を染付の青で描くと、主役の梅も波も「緒のチカラで浮き出してしまう。主役を引き立てる技法として墨はじきを使ったんだらうと。そういう人が気づかないところに手間と神経をしっかりと

るのでしょうか？」

大切なのはモノを作っていく姿勢だと思っています。以前、手で描く微妙なズレが手書きの大切なところだと思っていたんですよ。例えば幾何学的な雪の結晶。パソコンで完璧な60度の角度のものって描けるんですけど、それがきれいかっていうとそれよりも人間の手で描くことの微妙な角度や長さのズレが大切だと。ある時先輩との会話で「あなたもズレとか品格とかいろいろ言うけど危ないんだよ」ってお叱りを受けた。確かに、作り手が「この角度がずれるから良いんだとか」そこを意識し始めて求めたら「いやらしいもの」になってしまう。大切なのはモノを作っていく姿勢。そこから

けていく姿勢が品格につながるっていくのかなと。人が気づかないところに丁寧な仕事をすることが大切なんです。

「日々どんなことを
考えて創作されている

生まれてくるものが大事だと思うようになりました。

工芸と暮らす 丁寧な日常

「アスカクラブ会員の
皆様にメッセージを。」

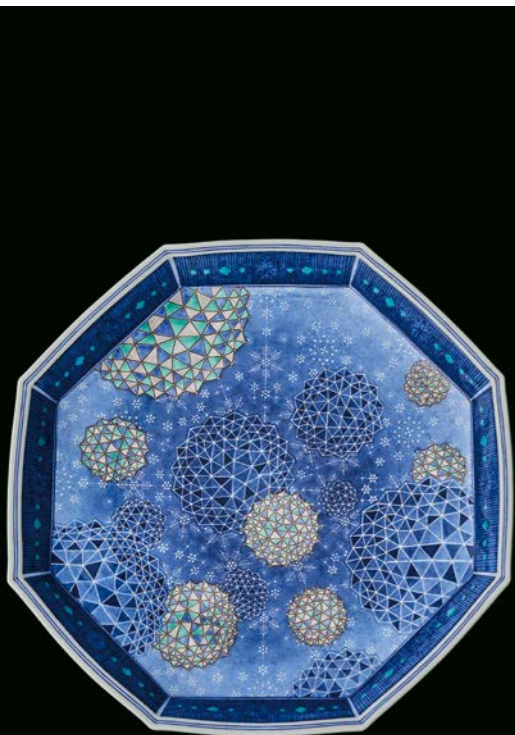
伝統工芸作品は古風なものと思われているかもしれませんが、けれども私は、現代の生活の中にこそ置いていただきたいのです。手間暇や情熱を傾けられて作られたものを生活の中に置くことによって、暮らす人も丁寧な生き方になってくるんです。器であれば、意識しなくても両手で持つ。日本人がずっと大切にしてきた美しい所作に繋がります。使い捨てではなく、モノを大切にする日本人のアイデンティティを伝統工芸は思い出させてくれるのです。それが日本工芸の現代における価値だと思っています。飛鳥IIの船内に飾られているものを、一つ一つ丁寧に感じていただければと思います。



→墨はじきの技法で描かれた青海波



色絵吹墨墨はじき紫陽花文額皿



工房を 訪ねる ツアー開催

飛鳥クルーズでは9月に今泉今右衛門氏の
工房を訪ねる寄港地観光ツアーを予定しています。
詳しくは19ページをご覧ください。



昨年10月、初乗船されたアコースティックギタリストの押尾コータローさんに飛鳥IIの印象と船旅の魅力をお聞きしました。ヴァイオリニストのNAOTOさんとのコンサートでは、お二人の超絶技巧に耳はもちろん目も釘付けとなりました。

もともと、NAOTOさんと仲が良く飛鳥IIのこともよく聞いていました。NAOTOさんがそんなに絶賛するのなら、というのが乗船のきっかけでした。今回ついに、二人の船上コンサートが実現しました。カバー曲なら、皆さんがよくご存じの曲も演奏したいね、でもオリジナルの曲も聴いていただきたいよねと、二人で曲選びをしているときから、飛鳥IIに乗船するのとても楽しみにして



いました。普通ヴァイオリンは楽器の中ではメインボーカルなのですが、NAOTOさんの場合は独自の一人伴奏スタイルみたいなものを確立しているの、メインも伴奏もできてしまう。だから、僕のギターがメインになったり、NAOTOさんのヴァイオリンがメインになったりということができるんです。今夜のコンサートでは、二人での演奏も、ソロ演奏もするので、いろいろな面を楽しんでいただきたいなと思っています。とにかく、昨日飛鳥IIに足を踏

み入れた瞬間から、船内の施設はもちろんスタッフの皆さんの対応から、飛鳥IIのすばらしさを肌で感じていきます。ミュージシャンとしても呼んでいただいたからには一流のパフォーマンスをしなくては、思わされますね。しかも、ディナーもすばらしくて、シェフにとでもおいしかったですと「明日はもっとおいしいですよ！」と言われました。これは僕たちも負けていられないぞと、気が入ります。

しいなと思いました。こうやって実際に船に乗ってみると、ゆっくりすることはすごく大切だと教えられる。特に仕事だと目的地へ早く着こうと思って新幹線よりも飛行機だ！みたいなになりがちですが、早いけれどその分疲れますよね。船はゆっくりだけれど、ふくよかな気持ちにさせてくれる気がします。ゆったりとした時間が気持ちリッチにしてくる。こういう時間が必要だったのだなと感じました。

どこかへ向かう
その過程が濃厚で大切な
時間になっていく

Photographs by Taishi Sakamoto

押尾コータローさん

ASUKA
Cruise
Interview
number

4

Kotaro Oshio

ま だ2日目ですが、海をただ眺めているだけでも素敵な時間ですね。海を見ながら入れる露天風呂があれば、映画館やカジノもある。楽しみつくせないほどの施設やイベントがあって、どんな風に過ごしても良い。何一つ不自由がないというのはすばらしいなと思いました。



NAOTOさんとの演奏も息ぴったり



乗った瞬間に
スイッチが切り替わって
わくわくする

押尾コータロー／02年にメジャーデビュー。オープンチューニングやタッピング奏法などのテクニクを駆使し、1本のギターで弾いているとは思えない鮮やかで迫力あるギターアレンジや、あたたかく繊細なギタープレイは世代を超えて多くの人々に支持を受けている。ソロアーティストとして全国ツアーなどのライブ活動を中心に、映画音楽、番組テーマ曲、CM音楽などの作曲も手掛ける。

2021年10月
「横浜 オクトーバー
ウィークエンドクルーズ」にて。

Kotaro Oshio

秋風わたる

瀬戸の海で

日本再発見

夏の暑さもようやく落ち着いて
海をわたる風も爽やかに感じられる頃
少し長めのクルーズに出かけませんか？

寄港地観光も楽しめて、
船内で過ごす時間もたつぷりある。
船からのビューポイントも豊富で、旬の幸も味わえる。
しかも、日本の伝統文化を学び
知的好奇心を刺激してくれる。
この秋、そんな贅沢な飛鳥クルーズを、
ご用意いたしました。

瀬戸内海

本州、四国そして九州に囲まれた日本最大の内海。紀伊水道、豊後水道で太平洋とつながり、関門海峡で日本海へとつながっている。干満差が大きいため穏やかに見える水面下には強い潮流が隠れている。日本三大潮流と言われる鳴門海峡、来島海峡、そして源平合戦で壇ノ浦の戦いが行われた関門海峡。そのすべてが瀬戸内海にある。

Seto Inland Sea



そろそろ
長めのクルーズに
乗船されたい
お客様に
おすすめです



田中雅久
クルーズ企画・
マーケティングチーム
チーム長

このクルーズは年内に催行される一番長い国内クルーズです。この長さだからこそ実現できた企画を数多く盛り込みました。リピーターの皆様にも楽しんでいただけたと思います。また、日本工芸会とのコラボレーションにより、MOA美術館の内田館長、漆芸家の室瀬先生に乘船いただきます。制作にまつわるお話を伺った後に、船内に展示されている工芸作品を鑑賞すると、伝統美への理解がさらに深まるのではないのでしょうか。

Cruise Information

秋の
西国漫遊クルーズ

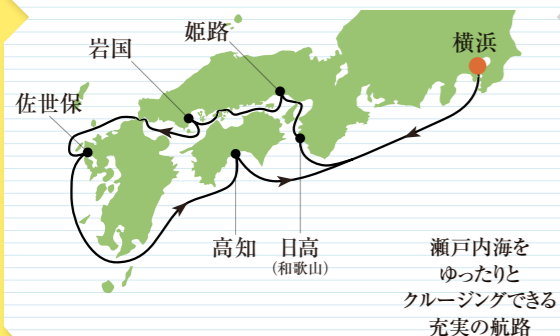
2022年9月19日(月・祝)~30日(金)

横浜発着 12日間

旅行代金
685,000円~3,316,000円

※アスカクラブ会員様向けに旅行代金より10%割引の特別代金となります(客室K・Sを除く)。

9/19	月・祝	横浜
20	火	クルージング
21	水	日高(和歌山)
22	木	姫路
23	金・祝	瀬戸内海クルージング
24	土	岩国
25	日	クルージング
26	月	佐世保
27	火	クルージング
28	水	高知
29	木	クルージング
30	金	横浜



十四代今泉今右衛門さん



知的好奇心を
刺激する
日本の
伝統美

船 内での楽しみとして、今回ご用意したのが、日本伝統文化を知るためのイベントの数々です。まずは、MOA美術館の内田篤具館長が伝統工芸の基礎をわかりやすく解説してください。そして、漆芸家・人間国宝でもある室瀬和美先生が自ら語る蒔絵の世界。佐世保からは寄港地観光ツアーとして、陶芸家・人間国宝の十四代今泉今右衛門先生の窯元を人数限定で訪れる予定です。

先生自らが工房を案内して下さるめったにない機会となるでしょう。さらに、文楽、狂言、落語、三味線などの伝統芸能もたっぷりとお楽しみいただけます。演者の方々が飛鳥IIのお客様のために考えてくださった二夜限りの特別な舞台ばかりです。どうぞご期待ください。



撮影：桂秀也

ギョウキシーランジが文楽の舞台上に

12 日間の航海の内、終日航海日が5日間含まれている「秋の西国漫遊クルーズ」。クルージングをたっぷりとお楽しみいただけます。まずは、日本が誇る瀬戸内海へ。飛鳥IIはすべるように進みます。瀬戸大橋や因島大橋の航行は、何度経験しても心ときめく瞬間。穏やかな海面は陽の光を反射してキラキラ光り、あらわれては過ぎていく緑の島々や、その間を細い航跡をひいて行き交う通

船に人々の暮らしを感じます。外のデッキやお気に入りのラウンジから、時を忘れてのんびりとお楽しみください。そして、本州と九州を隔てる関門海峡の航行も見所です。関門橋をくぐる前に見えてくるのが源平合戦の舞台となつた壇ノ浦。そしてくぐった後は巖流島を船上から見ることが出来ます。そして、鹿児島沖を航行する際には、薩摩半島南端にそびえる雄大な開聞岳も見逃せません。



美しい島々が浮かぶ瀬戸の多島海



開聞岳の前を航行する飛鳥II

船の上から
眺める
日本の

自然美

三つの
美から
日本再発見

造形美

寄港地から
訪れる
日本の

もちろん、寄港地観光ツアーも楽しみのひとつ。日高(和歌山)からは文楽の「日高川入相花王」にも描かれた「安珍・清姫伝説」の舞台・道成寺を訪れます。世界文化遺産にも登録された姫路城、そして天守が現存する高知城と二つの日本の城を巡ることもできます。さらに、岩国では伝統技術の粋を集めた木組みの技法でつくられた五連構造の錦帯橋を見学するなど、日本の伝統技術が光る造形美をお楽しみいただけます。



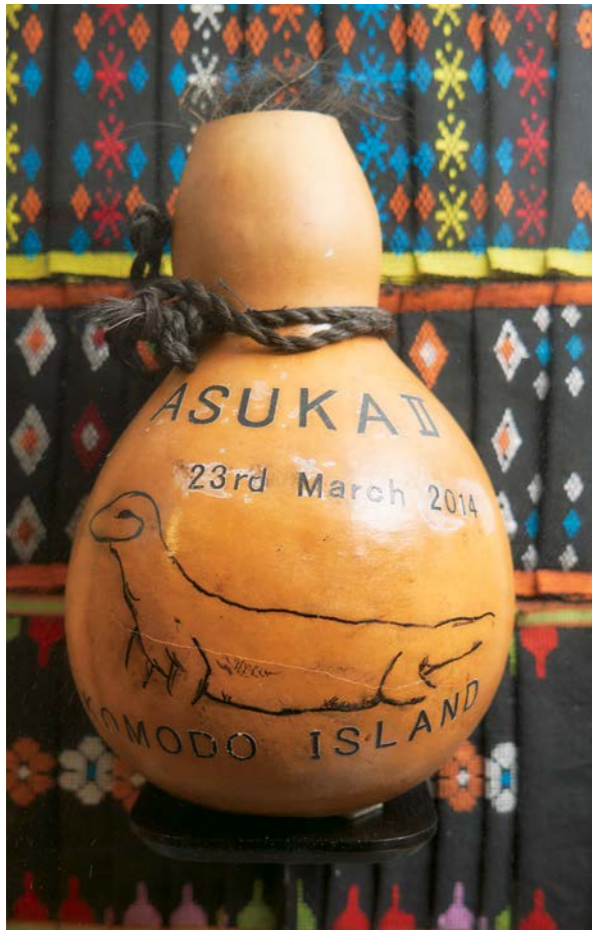
伝統技術の粋を集めた錦帯橋



世界文化遺産にも選ばれた姫路城

自然美、造形美、伝統美

特集2 秋の西国漫遊クルーズ



インドネシア
コモド島
2014年
世界一周クルーズ

これどこの港？ 個性あふれる プレートたち



韓国
チェジュ
2010年
秋の日本一周クルーズ



イギリス
リバプール
2007年
世界一周クルーズ



スペイン
ビーゴ
2015年
世界一周クルーズ



タヒチ
パペーテ
2009年
南太平洋グランドクルーズ



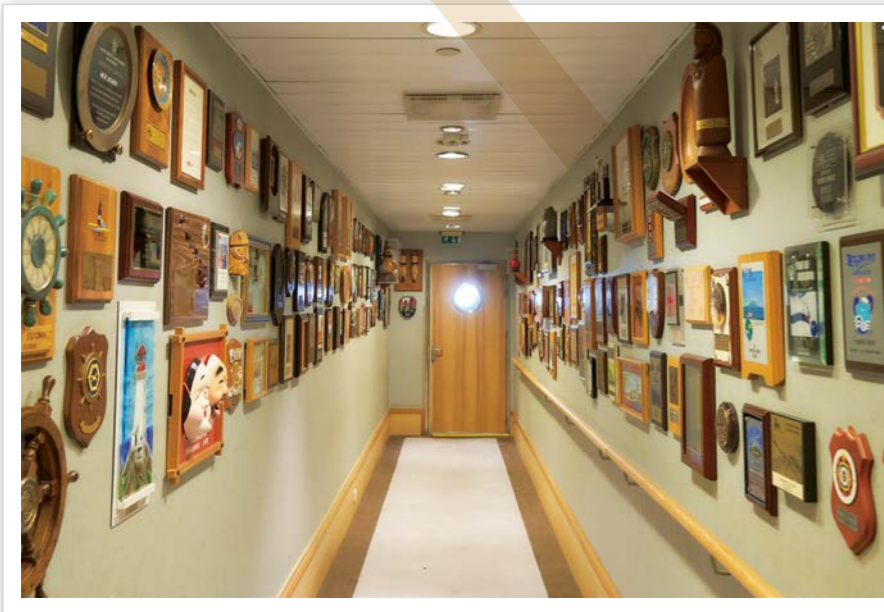
ミクロネシア連邦
チューク
2007年
オセアニアグランドクルーズ

寄港地プレート

初寄港を記念して
港や自治体から飛鳥IIに贈られる
「寄港地プレート」。
こうして並べてみると、実に個性派揃い。
地域の特産品が素材に使われていたり、
伝統技術がいかされていたり。
もはやプレートの概念を超えた
立体的なものがあつたり、懐かしい港もあれば、
いつか行ってみたいあこがれの港のものも。
眺めていて飽きません。



宮崎県
油津
2006年
チャータークルーズ



12デッキ、グランドスパ横の廊下に並ぶ寄港地プレート。じっくり眺めてみると、掲載したプレートも見つかりますよ。飛鳥IIに贈られたプレートはすでに船内に展示しきれなくなっているそうです。

掲載したプレートは船内のどこに飾られていますでしょうか？



ロシア
ペトロパブロフスク・カムチャッキー
2006年
北海道・カムチャッキークルーズ



パナマ運河
2014年
世界一周クルーズ



インドネシア
バリ
2010年
アジアグランドクルーズ



バヌアツ
バヌアツ
2009年
南太平洋グランドクルーズ

飛鳥の 美しい かたち

Collection 5

飛鳥IIにはさまざまな美が、さりげなく息づいています。その背景にあるストーリーを知れば確かめたくなくなるはずです。

小海老と
アボカドの
彩りサラダ



山澤廣志
セクションシェフ

2007年に入社。現在
ガtemanジャーシェフ
(前菜担当)とウエス
タンシェフ(西洋料理
料理長)を兼任。
飛鳥IIの厨房はチー
ムワークがいろいろ。

ディナーの前菜を担当する山澤ガtemanジャーシェフに前菜の役割や、アイデアがカタチになるまでのプロセス、お客様への思いなどを聞きました。

前

菜は二段階で提供されま
す。まず「アミューズ」とい
う和食でいう先附は、一
口二口で食べられて「もっと食べたい」と思わせ次を期待させるもの。続いて「アペタイザー」と呼ばれる、コース料理の一品目と言える存在が現れます。見た目の華やかさと楽しさで「いよいよディナーが始まる」「素敵な食事になりそう」とお客様に思っただけという流れです。

前菜を考えるにあたって、まずは総料理長が考えるディナー全体のイメージがあり、それを共有しながら考えます。総料理長が色鉛筆で描いた絵コンテを見ながら「こういう見た目のイメージでできるかな？ 味のイメージはこうで、硬さはこのぐらいで食べてもらいたい」というの聞いて、何回か試行錯誤をして総料理長に食べてもらって、というやりとりをしてカタチになります。具体的なイメージがない場合は口頭で聞いて、私が発想していくこともあります。

ディナーの始まりに話が弾みだす、そのきっかけを作るのも前菜の役割だと思っています。例えば普段見かけない珍しい野菜が添えられていたら「これなんだろう？」と会話が始まる。いつもの野菜をうんと小さくしたマイクロ野菜やハーブを出したのも飛鳥IIは早かった。仕入れている八百屋さんが、珍しい野菜をあちこちの農家さんに出向いて探してきてくれる。「数は手に入りにくいけど飛鳥IIのお客様が喜んでくれるなら」と頑張って集めてくれるんです。前菜一皿にいろんな人の気持ちも入っているんですよ。

心がけていることは、船を降りられたお客様が「あのクルーズのディナーは美味しかった」「こんなコースが出てきて」と誰かに話したくなる、それが毎回の目標です。なぜなら、思い出に残るディナーはきっと「前菜」がいい仕事をしているはずですよ(笑)。

誰かに話したくなる
ディナーはきっと
前菜がいい仕事をしています。

フォアグラと
枝豆の
ヴィシソワーズ

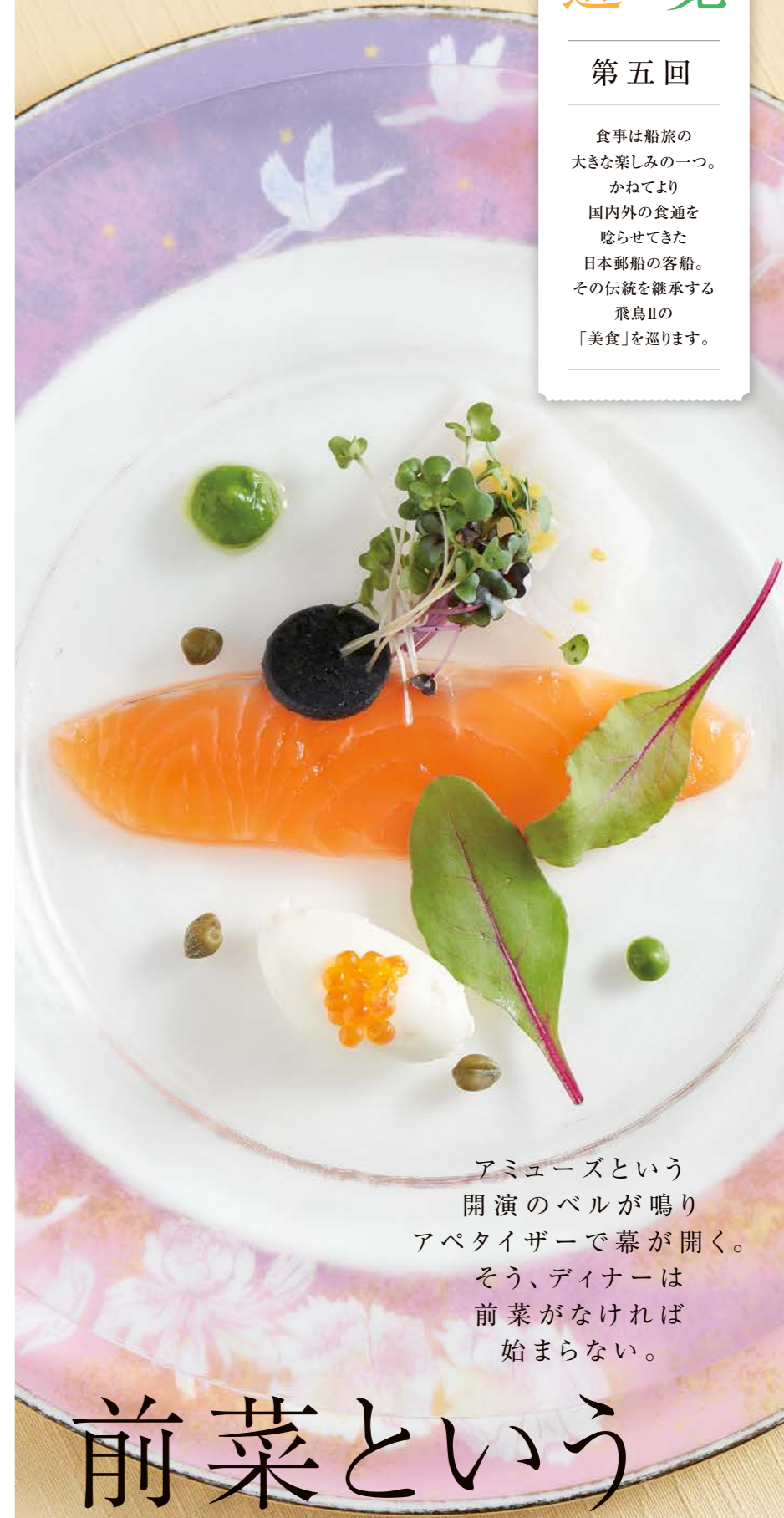


フランス産
オータムトリュフと
秋の実り



フランス産フォアグラのムースと
ドライフルーツナッツ
根セロリとヨーグルトのビュール

オーラキング
サーモンと
アオリイカのマリネ



美 食 遊 覧

第五回

食事は船旅の
大きな楽しみの一つ。
かねてより
国内外の食通を
唸らせてきた
日本郵船の客船。
その伝統を継承する
飛鳥IIの
「美食」を巡ります。

アミューズという
開演のベルが鳴り
アペタイザーで幕が開く。
そう、ディナーは
前菜がなければ
始まらない。

前菜という ときめき